

“Draft of a Paper on Bergson” における T. S. エリオットの哲学的思考

T. S. Eliot's Philosophical Thinking in
“Draft of a Paper on Bergson”

古 賀 元 章

Motoaki KOGA

英語教育講座

(平成22年9月30日受理)

はじめに

ハーバード大学大学院修士課程を修了後の1910年10月, T. S. Eliot (1888-1965) は本物の詩が存在すると考えるフランス (“What France Means to You” 94) へ1年間遊学した。当地では, 各分野で活躍する著名人が見られた。たとえば, 社会学者 Émile Durkheim (1858-1917), 社会学者 Lucian Lévy-Bruhl (1857-1939), 心理学者・神経学者 Pierre Janet (1859-1947), 批評家・小説家・詩人 Rémy de Gourmont (1858-1915), 小説家・批評家 Anatole France (1844-1924), 哲学者 Henri Bergson (1859-1941) らがいた (“A Commentary” 451-52)。

パリでエリオットは哲学にも関心を示して, ベルクソンが毎週金曜日に国立の高等教育機関コレージュ・ド・フランス (Collège de France) で行う講義に出席した。帰国後, 彼は草稿 “Draft of a Paper on Bergson” を脱稿した。彼の述懐によれば, 1910-11年のパリ滞在中に, ベルクソンの哲学への一時的な心酔を経験している (*A Sermon* 5)。当時の彼はまた, この哲学者の著書, 講義, 個性から想像力をかき立てられている (introduction to *Leisure* 11)。これらの事実を反映して書かれている彼の草稿の記述内容は, 今まで断片的にしか触れられていなかったが, Habib の著書によって詳しく紹介されている。

本稿では, この著書の紹介を参考にしながら, “Draft of a Paper on Bergson” に見られるエリオットの哲学的思考を論述したい。なぜなら, 日本ではこの哲学的思考がまだ十分に探究されていないからである。

1

エリオットの “Draft of a Paper on Bergson” は, ベルクソンの三つの著書 — *Time and Free Will, Matter and Memory, Creative Evolution* — に言及して, 彼の哲学を検討している。草稿1頁で問題点として記述されているのは, “antithesis of extrinsic and intrinsic multiplicity ... The inconsistencies of the *durée réelle*¹ ... The attempt to occupy a middle ground between idealism and realism” (qtd. in Habib 42) である。ここでは, これらの記述を, 便宜上, ① “antithesis of extrinsic and intrinsic multiplicity”, ② “The inconsistencies of the *durée réelle*”, ③ “The attempt to occupy a middle ground between idealism and realism” と番号を付けて検討する。

①については, *Time and Free Will* で扱われている。ここで, 次のようなエリオットの文を見てみよう。

On page 5, D. I. [*Données Immediates*] Bergson suggests that the difficulties of the problem there involved may result from our calling by the same name intensities of very different nature, the intensity of a sentiment and that of a sensation. Let me trace out the distinction which he thus establishes. *Pure* intensity, he now says, [‘]is reduced to a certain quality or matter which colors a *greater or smaller mass* of psychic states, or, a *greater or less* number of simple states which colors the fundamental emotion.[’] ... He continues, ‘the progressive modifications which come to pass in the *confused mass* of coexistent [*sic*] psychic facts (faits). But this is a change of quality, rather than of magnitude.[’] (qtd. in Habib 43)

“the difficulties of the problem there involved ... the intensity of a sentiment and that of a sensation.” は、“Perhaps the difficulty of the problem lies chiefly in the fact that we call by the same name, and picture to ourselves in the same way, intensities which are very different in nature, e.g. the intensity of a feeling and that of a sensation or an effort.” (*Time and Free Will* 7) を踏まえている。エリオットの文章の内容は、ベルクソンが認識する問題の難しさについてである。その難しさとは、感情、感覚、努力といった異質なものを同じ強さの名前で呼ぶことである。エリオットはこうした異質の判別に注目している。ベルクソンによれば、感覚自体は意識の表面でその強さの測定に関して恐らくかかわりがある身体的条件と結びついている現象のあり方であるが、深い喜びや悲しみ、内省的激情、美的情緒といったものはどんな外延的要素ともかかわりを持たずに自己充足している (*Time and Free Will* 7)。そうすると、自己充足的である純粋な強さに触れたエリオットの文章は、it [pure intensity] is reducible here to a certain quality or shade which spreads over a more or less considerable mass of psychic states, or, if the expression be preferred, to the larger or smaller number of simple states which make up the fundamental emotion.” (*Time and Free Will* 8) を土台にしている。そこではベルクソンは、純粋な強さが大小の塊（心的状態）に広がる質やニュアンス、言い換えれば、単純な状態の大小の数に還元できることを指摘している。“the progressive modifications ... magnitude.[’]” は、“it [consciousness] will hypostatize under the form of a growing desire the gradual alterations which take place in the confused heap of co-existing psychic states. But that is a change of quality rather than of magnitude.” (*Time and Free Will* 9) に基づいている。反省的意識は増大する強さの努力を行うため、筋肉の収縮を身体組織の一点に集中する。その現象を引き合いに出して、ベルクソンの文章は、共存する心的事実の塊の中で起こる斬新的変化を、増大する欲望という形で見て、大きさというよりも質の変化であると述べている。エリオットの記述内容はそのことを反映したものとなっている。

ここで、エリオットが上の引用文でイタリック体にしてある語や語句 — “*Pure*”, “*greater or smaller*”, “*greater or less*” — に注意を払ってみたい。草稿1頁の①と、こうしたイタリック体の使用を関連づけてみると、エリオットが留意するのは、大小といった量の外的（意識外の）多様性と、純粋な強さのような内的（意識内の）多様性の対照であると言えよう。

ベルクソンは基礎的情緒の中で、その性質を変えるばかりではなく、その大きさも増大させる新しい要素の介入の例として優美の感情を取り上げる。この美的感情論について、エリオットは次のような文章を書き留めている。

The explanation here is a substitution not essentially different from hypnosis. In the progress of this substitution — i.e. musicians and dancers the personality being substituted for the observers — there are phases, [‘]wh[ich] correspond less to variations of degree than to differences of state or nature’. (qtd. in Habib 44)

cannot also these differences of state or nature be expressed numerically? Yes. We distinguish, Bergson says, beside degrees of intensity, [‘]degrees of profundity or elevation. In analyzing this last concept, we see that the sentiments and thoughts which the artist suggests to us express and resume a *more or less* considerable part of his history.[’] (qtd. in Habib 45)

上の二つの引用文を視野に入れて、ベルクソンの美的感情を簡単に解説してみよう。被術者が催眠術師の身振りに従うように、芸術家（自然）の感情が示されると、われわれはその自然に共感することがある。そこに生じるわれわれのさまざまな美的感情の進行は、催眠状態の場合と同じように、区別のある段階がある。その段階は、程度の変化よりも状態や性質の違いに対応する。われわれの感情が、暗示されたものであるならば、美的性格を帯びるであろう。そこで、美的感情は、強さや高揚の程度を許容するように思われる。芸術家がわれわれに暗示する感情や思想は、程度の違いこそあれ、彼の心の歴史のかなりの部分を要約して表している（*Time and Free Will* 11-18）。このように、ベルクソンの優美の感情を考察しながら、エリオットは、内在性と外在性の2種類の多様性を疑い、この多様性が実際には時空的であることを示唆するのである（Habib 45）。

こうした2種類の多様性に基づくベルクソンの実在論について、次のようなエリオットの文章が見られる。

The realism of M. and M. [*Matter and Memory*] and C. E. [*Creative Evolution*] which is a realism of primary qualities, reduces these material objects, which form a number immediately, to a single movement without intervals. We are asked in the last books and in the recent essay on la Perception du Changement, to try to think of movements, without things which move. But this is just the permeation which we are here told, is the character of mental, not of external states. And this would go to show, that the numerical way of thinking is at least as original a mental characteristic as the interpenetrative. (qtd. in Habib 46)

ベルクソンの二著 — *Matter and Memory*, *Creative Evolution* — の実在論は、数値を形成する物質的対象を連続した単一の運動に還元することだという。彼は *Matter and Memory* の序文で、物質をイメージの集合体と紹介している（9）。実在は、このイメージによる集合体の対象が連続した単一の運動である。エリオットがこれら二著の中で、“movement is reality itself, and immobility is always only apparent or relative.”（*Creative Evolution* 155; Habib 52）や、“it [movement] is an absolute.”（*Matter and Memory* 196; Habib 52）に注目している。また、*La perception du changement* では、運動自体は変化と共に実在であることが主張されている（18-37）。これらの記述内容から明らかのように、ベルクソンにとって運動そのものが実在である。エリオットはそのことを書き留めていると言える。しかし彼によれば、ベルクソンの運動論は精神的状態の性格を帯びたものにすぎないのである。言い換えれば、対象が直接に意識に浸透したことの表れを意味するであろう。そこで、数による思考方法は、たとえば心の内外のものが相互に浸透し合うのと同じくらい、少なくとも独自の精神的特徴であると判断されているように思われる。

その後、エリオットは精神の領域と物質の領域に関して、次のように書いている。

You can *abstract* from the physical world *particular characters*, and thus constitute external relations; you can do the same with mental life; but ... it will not *work* as well for mental states as for physical objects. (qtd. in Habib 47)

物質の世界から特別の性格を抽象することができ、それによって物質間の外的関係が構成されるとする。これと同じことを精神の生命について行っても、うまく成功しないことが説かれている（ここでは、その理由は述べられていない）。それは、彼がベルクソンの実在論について批判的であることを意味する。

エリオットの草稿は、ベルクソンの哲学における多様な内在性と多様な外在性という2種類の多様性の対照（①）を論じている。その結果、二元論に基づく多様な内在性が同意されない。そこには、一元論の哲学を主張するイギリスの観念論哲学者 F. H. Bradley（1846–1924）に依存した彼の哲学的思考が見られる（Habib 46-47）。ブラッドリーが提唱する絶対者（the Absolute）は完全無欠な実在であるが、仮象（appearance）に宿るといふ。彼は、絶対者と仮象の相関関係を持ち出すのである。²

エリオットは、このようなブラッドリーの一元論を拠り所にして、ベルクソンの二元論を批評しているのである。彼によれば、このイギリスの哲学者の哲学は良識が基本であると考えている。³ 彼は、ベルクソンの哲学に見られる心の自由裁量よりも、この良識を土台としたブラッドリーの哲学に基づく心の規律を重視

するのである。

2

上の引用文では、われわれの知覚がイメージする外的関係の構成が示されている。そのイメージの対象が物質である。エリオットは、この物質の世界をきっかけに、“At this point, we enter upon the question of the nature of space – [a] question so capital in the philosophy of Bergson.” (qtd. in Habib 47-48) と記して、空間の性質の問題に目を転じる。“the Bergsonian space is very largely a borrowing from Berkeley” (qtd. in Habib 48) と述べて、彼はベルクソンの空間について次のような見解を示す。

Bergson's space is the Berkeleyan *pure* space; for Berkley non-existence ... for Bergson it cannot be so summarily disposed of – it both exists, and not exists ... Space is, as Bradley might say, not illusion but appearance. (qtd. in Habib 48)

イギリスの哲学者 George Berkeley (1685–1753) によれば、「事物はすべて観念として知覚されるかぎりにおいてのみ存在を知られる。……知覚されずに心の外に実在する物質世界はありえない。……一般に知覚される存在としての観念は、知覚される存在としての非観念的精神なくしてありえない」(『哲学事典』1093) のである。ベルクソンは、バークリーの誤りが物質をわれわれの精神の内部に移して、単なる観念にするべきだと信じたことを批判する。しかし彼は、このイギリスの哲学者のように、対象が心に存在するものであると述べる。その対象が空間であるとすれば、エリオットは彼らの考える空間が似ていると見なすのである。とはいえ、バークリーにとって、知覚されずに、心の外にある純粹空間は非存在である。ベルクソンは *Matter and Memory* の序文で、イメージについて、観念論者が表象と呼ぶものよりも勝っているが、実在論者が事物と呼ぶものよりも劣っている存在で、事物と表象の間であると解釈する (9)。そうすると、イメージ化された空間は、表象として存在するが、事物として存在しないことになる。その空間が、“a middle ground between idealism and realism” (qtd. in Habib 48) と書かれている (③の記述内容)。エリオットが依拠する空間観は、はっきりと対応できないベルクソン流の幻想ではなく、実在(絶対者)が内在するブラッドリー流の仮象である。

エリオットはさらに空間論を展開する。“That which is given, that which is real, is something intermediate between divided extension and pure inextension.” (*Matter and Memory* 245; Habib 49) を引用して、彼は次のように書き記す。

[Bergson] has thrown space overboard entirely ... Homogeneous space then, consequently any extrinsic relations given by analysis, will be simply the reflection of the intellect ... Homogeneous space can be only an extrinsic relation set up *inside* our intrinsic relations, (qtd. in Habib 49)

ベルクソンによれば、抽象的空間の広がりやを区分することによって、無限に分割可能な延長が構成されたり、また、その構成を微細に区別して得られる広がりのない感覚によって、イメージが再構成されたりする (*Matter and Memory* 245)。彼の著書からの引用文の “something intermediate” は、このように広がっているものを指している。延長物の感覚的性質の連続の背景に、変形可能であったり、縮小可能であったりする網が考えられる。この観念的な図式が、彼にとって、等質空間である (*Matter and Memory* 209-10)。しかしエリオットは、この哲学者の等質空間が、われわれの知性の反省に基づく内的関係の中で構築された外的関係にすぎないと判断する。その判断には、既述した “Space is, as Bradley might say, not illusion but appearance.” という文章の内容に依拠して、ブラッドリーの絶対者(実在)と仮象のかかわりを手がかりにして論じている彼の哲学的思考が認められる。

上の引用文では関係の内在性と外在性の問題が触れられている。この問題について、エリオットは次のように考える。

[Relations] must either be thought of as in the end completely internal, in which case you have a final point of view — the absolute — or they are already partly externalized — in which case I see no means of stopping short of a thorough-going realism. (qtd. in Habib 49-50)

関係が内在すると考えるならば、絶対者を想定することになる。この絶対者だけが実在となり、客観的な実在性のない仮象と内在的な関係となる。一方、さまざまな事象が、われわれの心の外に独立して存在し、他の事象との関係が外在的となる。前者が観念論であり、後者が実在論である。関係の内在性と外在性を糸口にして、彼は、絶対者を想定した一元論の観念論と、個々の事物が独立した実在論の二分法を考える。

この二分法を背景にして、エリオットは、生命の進化に関連したベルクソンの意識と物質のあり方を探究する。その点について、彼は次のように考えている。

“Reality, though I should judge *one* at bottom divides itself into a Cartesian dichotomy — the way up, consciousness, and the way down, matter” (qtd. in Habib 50)

エリオットは、実在が本当は“one”と判断している。この“one”はブラッドリーの「絶対者」を指している。彼は一元論的観念に基づいて、ベルクソンの実在観を批評する。*Creative Revolution*の記述内容を引き合いに出して、彼が書き留めたベルクソンの実在観に注目してみたい。一般的な広がりにおいて、延長はわれわれの緊張が中断することによって生じる。この中断はわれわれの意志が緩むことによるものである。実在は壊れていく事物である。そうすると、われわれの目に映る物質的世界は、落下するおもりという姿であるという印象になる。その一方で生命は、下る坂を上ろうとする努力を示している。たとえば、腕を持ち上げる動作を考えると、放っておけばまた垂れてします。しかし腕には、活力を与えた意志が幾分か残っていて、また持ち上げようとする(244-51)。その試みには、意識の働きが認められよう。意識や物質に関するこうした言及が、“the way up, consciousness, and the way down, matter”という表現に含まれているように思われる。『哲学事典』によれば、フランスの哲学者Runé Descartes (1596-1650)は、「自然を全く機械的に見る。そこにあるものは、ただ物体とその運動のみである。……運動も全く外延的、空間的に場所の移動とのみ理解される。そして、運動の原因としての内包的な力の概念はしりぞけられる。ここに思惟実体としての「精神」と延長実体としての「物体」とを峻別する、いわゆるデカルトの物心二元論が現れるのである」(969)。このような彼の物心二元論が、“a Cartesian dichotomy”という表現でベルクソンの実在の二元論に適用されているのである。

ブラッドリー的一元論の視点から、ベルクソンの実在論を批判して、エリオットは本稿で以前に引用したこのフランスの哲学者の考えを記述する。その考えは、実在が“*something intermediate between the divided extension and the pure inextension*” (qtd. in Habib 50)ということである。つまり、実在は延長物と非延長物を取りもつ広がりである。

エリオットは、*Matter and Memory*の最後の第4章を最も重要なベルクソンの哲学であると見なして(Habib 52)、同章からの箇所(182)を踏まえた次のような英文を書いている。

What is the exact different between the heterogeneous qualities which succeed each other in our concrete perception and the homogeneous changes which science sets behind these perceptions in space? The first are *discontinuous* and cannot be deduced from one another; the second on the contrary lend themselves to calculation. (qtd. in Habib 52)

問題にされているのは、具体的知覚の中で継起する異質的性質と、科学がこの知覚の背後にある空間に置く等質的变化との正確な違いである。異質的性質は、非連続的で、互いから得ることができない。等質的变化は、計算から得ることができるという。ベルクソンは上の記述内容に続けて、両方の質の違いを追及する。実際の具体的知覚が純粹知覚による無数の記憶力の総合であるならば、感覚的性質の異質性はわれわれの記憶作用の収縮によるものである。客観的变化の相対的等質性はこの記憶作用の自然な緊張によるものである。その結果、この緊張が、記憶力におけるような量と、具体的知覚や科学におけるような質を仲裁するのであ

る (*Matter and Memory* 182-83)。

このように、ベルクソンの哲学で具体的知覚と記憶作用が触れられている。両者に欠かせないのが持続する運動である。この運動が彼にとって実在である。そこで、たとえば、既に言及した “movement is reality itself, and immobility is always apparent or relative.” や、 “[without real motion] nothing in universe would change.” (*Matter and Matter* 194; Habib 52) などに言及して、エリオットは次のような文章を書き残している。

This is important ... Bergson argues for the existence of movement independent of consciousness ... How is it that we seize in perception at one and the same time a *state* of our consciousness and a reality independent of us? ... Bergson appeals to the motions revealed by physics as the basis of matter ... And just in making this appeal to science he seems to me to throw up his case against science. Return to the immediate, he says; science gives only abstractions. But when science gives motion, he accepts it. (qtd. in Habib 52)

実在はベルクソンにとって運動そのものである。そこで、われわれの意識から独立した運動が論議されるのである。“we seize in perception at one and the same time a *state* of our consciousness” は、*Matter and Memory* の “we grasp, in perception, at one and the same time, a state of our consciousness and a *reality* independent of ourselves.” (203-04) を踏襲している。この踏襲された英文を主張するため、彼は同著の中で、われわれの意識がわれわれから独立した空間での物体（物質的対象）の運動を感覚的に把握し、感覚がその内容を空間に投射して物体の運動と重なり合うことを述べている (202)。その際、われわれは、感覚を持つ意識と、実在としての物質の運動を全く同一に知覚することになる。エリオットが疑問視するのは、空間における物質の運動の世界と、感覚を持つ意識の世界が併存することである。なぜなら、彼がブラッドリーの哲学を適用した一元論に基づいているからである。宇宙での現実的な運動は現実的な原因を持つ点があり、その点は力から生じる。自然科学では、力は質量と速度の関数なので、加速度によって測定される。この力は宇宙で生じる物質の運動によって見積もられる。そのようなことが、“Bergson appeals to the motions revealed by physics as the basis of matter” に反映されているのであろう。また、“And just in making this appeal to science he seems to me to throw up his case against science.” から推察して、エリオットは運動そのものを過度に重視する印象を弱くしているように思われる。われわれの意識は、既述したように、対象を直接に知覚するが、力学が研究する運動は抽象あるいは記号で、現実運動の相互比較を可能にする共通の尺度（分母）にすぎない。この現実運動は、時間の各瞬間をさまざまな性質の糸でつないでいる。その糸は、われわれの意識の連続と似ている (*Matter and Memory* 202-03)。これらの論考に類似した内容が、“Return to the immediate, he says; science gives only abstractions. But when science gives motion, he accepts it.” に含まれているであろう。

上の引用文の後に、次のようなエリオットの文章が書かれている。

Motion is reality, is the last word of M[atter] and M[emory], but this question remains unanswered: *what is motion*, apart from consciousness on the one hand, and from sensation on the other hand? (qtd. in Habib 53)

これまで *Matter and Memory* の記述内容を書き綴って理解した結果、エリオットは、同書の核心が “*Motion is reality*” であると判断している。しかし、彼が納得していないのは、意識や感覚から離れた動きが何であるかということである。既述したように、われわれの意識から独立した空間での物質の運動はその意識の中で感覚的に把握されると同時に、感覚はその内容を空間に投射して物質の運動と重なり合う。そこで動きは、ベルクソンにとって、意識や感覚と密接なかわりがある。空間での運動は、相互浸透するという点で、意識や感覚と質的多様性のつながりがあると考えられる。ところがエリオットは、意識や感覚から離れた空間の動きが何であるかが未解決だと見なしているのである。

以前に、エリオットは関係の内存在性と外在性を論じていた。ベルクソンの哲学は、内存在性の意識の領域と、意識から独立した外在性の物質の領域とによって構成されていた。この点について、空間の動きを考えるエ

リオットは次のように記している。

Certainly, if the concept of extension is to hold, Bergson's philosophy must stand as a kind of pluralism, and a kind of realism as well ... But there are many other statements ... which intimate a much more monistic point of view. Such are all those which speak of a *single* force, a *single* of current. Sometimes a current opposed to matter, sometimes a current of which matter is but an eddy. (qtd. in Habib 50)

意識から独立した空間での広がりがあるならば、そこでは意識や感覚の質的多様性がうかがわれるので、ベルクソンの哲学は一種の多元主義であり、また一種の实在論であると、エリオットは判断している。こうしたベルクソンの哲学の特徴に対して、後に続く文章が彼の立場を表明している。それは、明らかにブラッドリーの哲学に基づく一元論である。

3

本稿の冒頭で述べたように、エリオットは1910-11年のパリ在学中に、ベルクソンの哲学の影響を受けている。その影響を反映して、“The Love Song of J. Alfred Prufrock” (1910-11) がこの時期に書き上げられたとき、彼はベルクソンの心酔者であった (Ackroyd 41)。そこで、ベルクソンの哲学がこの詩の中でどのように反映されているのかを検討してみたい。

この詩は次のような書き出しである。

Let us go then, you and I,
When the evening is spread out against the sky (13)⁴

“I” は、この詩の表題からわかるように、語り手のJ. アルフレッド・プルーフロックである。“then” から判断して、何かを話題にした後、彼は夕暮れに相手を誘ってどこかに行こうとする。

彼らが訪問するのは、社交婦人たちのいる部屋である。そこでは、彼女たちは、イタリアの彫刻家・画家・建築家ミケランジェロ (1475-1564) を話題にしながらい、行ったり来たりしている。

しかし、プルーフロックは社交婦人たちへ近づくことを避けて、部屋を取り巻く外の状況に目を移す。この状況が次のように描かれている。

The yellow fog that rubs its back upon the window-panes,
The yellow smoke that rubs its muzzle on the window-panes,
Licked its tongue into the corners of the evening,
Lingered upon the pools that stand in drains,
Let fall upon its back the soot that falls from chimneys,
Slipped by the terrace, made a sudden leap,
And seeing that it was a soft October night,
Curled once about the house, and fell asleep. (13)

エリオットの生まれ故郷はミズリー州のセントルイスである。この都市は、隣のイリノイ州にある炭田の煙突から時々やって来た濃霧で覆われた (Smidt 3)。そうすると、1-5行目は、この都市の当時の光景を土台にしている。霧と煙の描写は、猫の動作にたとえられ、彼の子供時代のいたずら盛りの姿⁵を思い起こさせる。

“The Love Song of J. Alfred Prufrock” では、プルーフロックという名前にもセントルイスから借用されている。その名前は、少年エリオットがこの都市で見かけた店の看板に書かれていたものである (Wyant I-8)。

こうして、この詩ではエリオットの子供時代が取り入れられている。後年の彼は、語り手のプルーフロッ

クが40歳位の男性であったと同時に、自分自身であったことを述懐している（T. S. Eliot ... An Interview” 17）。そこで、彼の言動にエリオットの子供時代のどのような表現が反映されているかを検討してみよう。プルーフロックは次のような内容を口に出す。

And I have known the eyes already, known them all—
The eyes that fix you in a formulated phrase, (14)

これは、彼が部屋の中の社交婦人たちを妙に意識した発言である。彼女たちの部屋は、霧や煙が立ち込めて外の世界から孤立した状態にある（Brooks and Warren 391）。この状態から読み取れるのは、彼が著名な人物を話題にしている華やかそうな社交世界を揶揄していることである。彼の発言はまた、実らない恋、勇気のなさなどを通して、自分自身の心の満たされない人生を感じているのである。

エリオット家では、祖父（母親の義父）William Greenleaf Eliot (1811–87) の教えから逸脱する行為は、罪であると見なされた（“American Literature and the American Language” 44）。祖父は死後も墓場から同家を支配する一種の遺訓があった。それは、公共への義務、慈善、立派な仕事を行うことであった（Pritchett 73）。この遺訓が彼の教えの土台となっていたと言える。そうした厳格な家庭環境と深く関係しているのは、祖父が生前、精力的に普及に努めたキリスト教のユニテリアン派⁶であった。この宗派への信仰の厚いエリオット家で義父の遺訓を堅持しようとした母親 Charlotte Champe Eliot (1843–1929) は、子どもたちが義父の偉業を忘れないように願って、1904年に回想録 *William Greenleaf Eliot* を出版した。この回想録の中で、彼の美しい目の真剣な表情が記されている（58）。これらの事実とセントルイスのこの詩へのかかわりとに注意を払うと、“The (the) eyes” は、祖父の目ばかりではなく、母親や姉たちの目も暗に指しているであろう。また、“a formulated phrase” は、上述した遺訓を暗示しているであろう。したがって、エリオットは語り手の優柔不断な言動を通して、家の遺訓や宗教を素直に受け入れられない悩みを吐露しているのである。

このように、エリオットは“The Love Song of J. Alfred Prufrock”の中で、プルーフロックの狐疑逡巡を描きながら、同時に自らの個人的感情も盛り込んでいるのである。このことを考慮に入れてベルクソンの影響を指摘するため、本稿で引用した冒頭の詩行に立ち返ってみよう。プルーフロックは内面の自己に語りかけて、夕暮れ時に社交婦人たちのいる部屋に行く。そこには、ベルクソンの *Time and Free Will* での自我の考察が反映されているように思われる。われわれには二つの自我が見られる。一つは心の中で活動する内的自我であり、今一つは表層的自我である（125-26）。この詩では、“I” が前者に相当し、“you” が後者に相当する。これら二つの自我が一緒になってわれわれの人格が形成されている。そのことが、プルーフロックの動きに認められる。他方、エリオットの個人的感情に注意を払えば、表層的自我は教育方針に従順でない現在の彼であり、内的自我は子供時代の彼であると言える。

ここで注目されるのは、エリオットが楽しかった子供時代（Ackroyd 13）を記憶することである。そこには、ベルクソンが考察する記憶の問題に取り組む彼の姿がうかがわれる。この哲学者によれば、記憶は多数の瞬間を収縮するものである。この記憶によって肥大したわれわれの知覚が過去を収縮するのに比例して、われわれの行動は未来を処理するであろうから、記憶は過去を現在へと延長する。その際、過去から受けた作用を直接に反作用するのが物質の基本法則である（*Matter and Memory* 210）。それは、記憶が「過去を同一なまま反復できないようにする内的な力」（篠原 33）であると言える。エリオットは子供の時から、祖父が築き、母親がそれを実行していた教育方針に馴染めないうちから、記憶として植え付けられた彼女の教育方針が、現在のエリオットの苦悩の一因となっている。ベルクソンの哲学における記憶を利用して、彼はこうした嫌な内容の記憶をそのまま繰り返させないための力として、楽しかった子供時代を思い起こしていたと判断される。その行為が、この詩の冒頭から煙霧の場面までの詩行に盛り込まれていたと言える。

ところが、部屋の中で見られる社交婦人たちの動きは、生き生きとしていないで、空回りしている印象を与えている。また、猫の動作を思わせる煙霧の動作も、その部屋の中に入るのをどことなく尻込みした感じである。

このような描写は、運動を実在として絶対化していたベルクソンの哲学に懐疑的であったエリオットの姿を暗に映し出している。この彼の姿が、煙霧の場面の後に続く詩行にも描かれている。たとえば、次のような詩行を見てみよう。

There will be time, there will be time
To prepare a face to meet the faces that you meet; (14)

ブルーロックはしきりに時間を気にして、“the faces”が示唆する社交婦人たちへ接近することをためらっている。このためらいは、エリオットが家の教育方針にとまどっていることを暗に表している。また、ベルクソンは、具体的知覚の中で継起する異質的性質と、空間における等質的性質に分けていた。彼は、このような二分法を時間論にも適用して、われわれの外の等質的空間における時間の量的多様性と、われわれの内部における時間の異質的多様性に区分している。前者の一例が数であり、後者の一例は相互浸透する意識である。真の時間としての持続は、ベルクソンの場合、後者である。そのような時間論からすれば、何事も新しく生まれ変わることができる。それは、物と心を分けて考える二元論である。こうした二元論は、「絶対者」を土台とする一元論に依拠したエリオットにとって受け入れられない。このような哲学的思考も、家の教育方針に苦しむことと共に、ブルーロックのためらう行動に隠されているのである。

ベルクソンの時間論を踏まえた次のような詩行も目を向けてみたい。

Do I dare
Disturb the universe?
In a minute there is time
For decisions and revisions which a minute will reverse. (14)

ブルーロックの大言壮語は、彼の実らない恋の対する言い訳に解せられる。この大言壮語はまた、既述した家の教育方針への反発を感じられまいとするエリオットの防御にも解せられる。ベルクソンの持続論を拡大解釈すれば、宇宙はいつも創造がされる場である。そこで、真の時間としての持続と創造は一体となる(篠原 22)。しかしエリオットの場合、家の教育方針の力が強すぎて、楽しかった子供時代を駆使しても、この一体化が実現できないのである。したがって、上の詩行はさらに、ベルクソンの時間論の批評に悪戦苦闘するエリオットの姿も暗に伝えているであろう。

“The Love Song of J. Alfred Prufrock”は次のような詩行で終わっている。

We have lingered in the chambers of the sea
By sea-girls wreathed with seaweed red and brown
Till human voices wake us, and we drown. (17)

“We” (“we”) や “us” がブルーロックと彼の内面の自己である場合を考えてみよう。彼は、外見上賑やかそうな社交婦人たちの部屋とは対照的に、静寂な海の部屋にいたいことを望んでいる。彼は、彼女たちの存在を忘れていないことを遠回しに言っているのである。そこで、最終行の溺死のイメージは、この詩の冒頭で描かれていた詩行 “Let us go then, you and I, / When the evening is spread out against the sky” を連想させるであろう。その意味で、この詩は円環構造となっているのである。

“We” (“we”) や “us” がエリオットと彼の内面の自己である場合も考えてみたい。ブルーロックが社交婦人たちを忘れていないことは、エリオットが母親たちやエリオット家の教育方針を意識していることを意味する。上記の溺死のイメージは、生家の近くを流れていたミシシッピー河を思い起こさせる。それは、彼が母親の元に引き寄せられ、パリから帰国後も求めるべき生き方を模索する苦悩の日々を暗に伝えているであろう。

加えて、エリオット自身を間接的に描く上記の場面を、“Draft of a Paper on Bergson”におけるエリオットの哲学的思考の視点から検討してみることとする。彼は、主として母親が行った教育方針を素直に受け入れられずに苦しむことを楽しかった子供時代で解消しようとした。このような行為は、ベルクソンの記憶論を適用したものであるが、苦悩から脱した新しい創造には持続が求められる。そこにも、この哲学者の持続論が認められる。しかし、最終行の溺死のイメージは、彼の哲学から求めるべき生き方が得られないことも示唆しているように思われる。そのことは、エリオットの書き残した文章 “we cannot rest at the *durée réelle*. It is simply not final.” (qtd. in Habib 53) から読み取ることができよう。この文章が

既述した②の答えとなっているのである。

おわりに

結局、エリオットが辿り着いたベルクソンについての哲学的思考は、“nothing essentially new can ever happen; the absolute, as Bradley says, bears buds and flowers and fruit at once ... A is already so completely B, and B so completely A that there is nothing to say about either ... This is my interpretation of Bradley.” (qtd. in Habib 53) という文章で表現されている。ブラッドリーの絶対者が、芽と花と実を一緒に有した実在としてたとえられている。エリオットは、この絶対者と仮象の相関関係を自らの哲学的思考の土台としているのである。

エリオットはまた、“The Love Song of J. Alfred Prufrock”の中でベルクソンの哲学を適用しながら、主に母親から受ける家庭教育の現状に向き合っていた。そのとき、この哲学者の哲学の不満がそのままこの現状の不満にも反映されていたのである。

結果的に、“Draft of a Paper on Bergson”におけるエリオットの哲学的思考は、良識あるブラッドリーの哲学を重視していたばかりではなく、自分の詩作にも深く影響を及ぼしていたのである。

注

1. ②は実際には削除されている (Habib 261)。
2. この点については、拙稿「*Three Essays on Kant*におけるT. S. エリオットの中道的思考」を参照。
3. この相関関係については、輪島12-14を参照。
4. “The Love Song of J. Alfred Prufrock”からの引用はすべて *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* による。括弧内の数字はこの作品全集の頁を表す。
5. *The Letter of T. S. Eliot* の248頁と249頁の間に挿入されている写真を見れば、当時の彼のいたずら盛りが推察できる。
6. この派については、次のような解説を参照。

“It [Unitarianism] is essentially Puritanism drained of its theology, since it denies the central tenets of predestination and damnation; heaven and hell are of less account than the mundane space which we inhabit between them. The measure of Man is Man himself and a peculiarity American optimism, about the progress and perfectibility of humankind, is thereby given a qua-spiritual sanction.” (Ackroyd 17)。

引用文献

- Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life*. New York: Simon and Shuster, 1984.
- Bergson, Henri. *Essai sur les données immédiates de la conscience*. 1927. Paris: Presses universitaires de France, 1899. Paris: Félix Alcan, 1899. Paris: Presses universitaires de France 1985.
- . *Time and Free Will: An Essay on the Immediate Data of Consciousness*. 1910. Trans. F. L. Pogson. London: George Allen and Unwin, 1913.
- . *La perception du changement: conférences faites à l'Université d'Oxford les 26 et 27 mai 1911*. Oxford: Clarendon P, 1911.
- . *Creative Evolution*. Trans. Arthur Mitchell. New York: H. Holt, 1911. London: Macmillan, 1911. New York: UP of America, 1983.
- . *Matter and Memory*. Trans. Nancy Margaret Paul and W. Scott Palmer. London: George Allen and Unwin, 1911. 1988. New York: Zone Books, 1991.
- Brooks, Cleanth, and Robert Penn Warren. *Understanding Poetry*. 1938. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1966.

- Eliot, Charlotte Champe. *William Greenleaf Eliot: Minister, Educator, Philanthropist*. Boston: Houghton Mifflin, 1904.
- Eliot, T. S. “Draft of a Paper on Bergson.” 1910-11. The T. S. Eliot Collection, Houghton Library, Harvard.
- . “A Commentary.” *Criterion* 13.52 (Apr. 1934): 451-54.
- . “What France Means to You.” *La France Libre* 8.44 (15 June 1944): 94-99.
- . *A Sermon, Preached in Magdalene College Chapel*. Cambridge: Cambridge UP, 1948.
- . Introduction. *Leisure, the Basis of Culture*. By Josef Pieper. Trans. Alexander Dru. London: Faber and Faber, 1952. 11-17.
- . “T. S. Eliot ... An Interview.” *Grantite Review* 24.3 (1962): 16-20
- . “American Literature and the American Language.” 1953. *To Criticize the Critic and Other Writings*. London: Faber and Faber, 1965. 43-60.
- . *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1: 1898-1922*. Ed. Valerie Eliot and Hugh Haughton. London: Faber and Faber, 2009. 2 vols. 2009.
- Habib, M. A. R. *The Early T. S. Eliot and Western Philosophy*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Pritchett, V. S. “‘Our Mr. Eliot’ Grows Younger.” *New York Times Magazine* (21 Sept. 1958): 15, 72-73.
- Smidt, Kristian. “Dikteren og kritikeren T. S. Eliot 75 år imorgen (“The Poet and the Critic T. S. Eliot 75 Years Old Tomorrow”). *Aftenposten* 25 Sept. 1963): 3.
- Wyant, William K. Jr. “Nobel Winners.” *St. Louis Post-Dispatch* 81.315 (29 Nov. 1959): I-1, I-8.
- 古賀元章. 「*Three Essays on Kant* における T. S. エリオットの中道的思考」『言語文化学会論集』34 (2010): 181-94.
- 篠原資明. 『ベルクソン—〈あいだ〉の哲学の視点から』. 東京：岩波書店, 2006.
- 林 達夫他監修. 『哲学事典』. 1971. 東京：平凡社, 1993.
- 輪島士郎. 『T. S. エリオットの詩と真実』. 金沢：高島出版, 1988.

